平安朝四季歌の「…人」表現

――八代集の傾向と「問ふ人」その他をめぐって――

倉田　実

はじめに

表題の「…人」表現とは、「植ゑおく人」「尋ぬる人」「宿りし人」などというように、一語以上の多様な修飾語が「人」という語にかかることによって、人物を関係的・説明的に指示する形式のことである。この「…人」表現の形が、八代集における平安朝恋歌においてどのように使用されていたかの検討を本誌前号[1]で行ったが、本稿ではそれに続いて四季歌でのあり方を検討しようとするものである。「…人」表現の認定や用例の処理の仕方などについては前稿を参照されたい。テキストは『新編国歌大観』に拠り、『金葉集』は二奏本を使用したが、いずれも表記は私に換えた。

一　「…人」表現の傾向

「…人」表現が八代集四季歌でどのように使用されているかを歌集別に数値で示せば、以下のようになる。『拾遺集』だけにある「雑春」「雑秋」とする部立は除外している。なお、ここでいう種類とは、「見る人」「見ぬ人」「見む人」などをすべて「見る人系列」としてひと括りにし、これを一種とすること、前稿と同じである。総計の種類は、延べではなく、異なりの数になる。歌集名の下に付した数字は四季歌数を示し、それに対する「…人」表現が使用される和歌の割合を示している。また、参考までに恋歌における比率を示した。

古今集　(342首)…16種類24首(7%・恋歌10%)
後撰集　(506首)…21種類42首(8%・恋歌7%)
拾遺集　(262首)…17種類21首(8%・恋歌13%)
後拾遺集　(424首)…25種類48首(11%・恋歌12%)
金葉集　(304首)…11種類17首(5%・恋歌11%)
詞花集　(160首)…12種類14首(8%・恋歌12%)
千載集　(475首)…18種類22首(4%・恋歌10%)
新古今集　(706首)…31種類43首(6%・恋歌9%)
総計　(3179首)…74種類231首(7%・恋歌10%)

四季歌では、平均して7%の歌に「…人」表現が使用されているが、恋歌の10%と比較すると少ない使用となる。恋歌は、まさに人事であり、恋する相手や自身をどのように把握するかに要点があった。比率が高くなるのは当然であったが、四季歌においても人事が絡んでいることは確かである。ここは「…人」表現の場合に限っているので、実際的には人事の絡む四季歌はもっと多くなるが、とにかく「…人」表

現が四季歌の一画も担っていることは見逃せない。

歌集別では、三代集、特に『後撰集』で基本的な「…人」表現の型が形成され、『後拾遺集』で変容しているが、それは数値的な点でも認められる。使用される種類が多いのは、『後撰集』と『後拾遺集』と『新古今集』になっている。『後拾遺集』を屈折点とする和歌史的な理解は、「…人」表現の量と質からでも追認できるのである。また、古今的表現の再生となる『新古今集』は、パーセンテージは低いものの、用例の種類が豊富であり、集大成的になっている。

以上の74種類231首の用例をすべて挙げて検討するのは、煩瑣になるばかりなので、ひとまず用例数が5例以上のものを多い順に整理すると次の表のようになる。数字は用例数（歌数）で、空欄は用例ナシである。ただし、『新古今集』の一首（八五）に「行かむ人来む人」の形で重用がある。

系列	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古	総計
問ふ人系列	3	5	2	7	1	2	2	4	26
見る人系列	5	6	1	4	2			4	22
来る人系列	2	1	3	6	4	1		2	20
待つ人系列	3	3			2	2	1	2	13
知る人系列	1	3		1	2	1	2	1	11
都の人系列		2	1		3	1	2	2	11
行く人系列	1		2	4	1			3	11
昔の人系列	1			1			2	2	6
聞く人系列			1	1		1	2	1	6
尋ぬる人系列				3			1	1	5
物思ふ人系列		3		1				1	5

一つの歌集で同系列の用例が三首以上あるものは、この表に挙げた以外にない。この系列以外のものは、散発的な使用である。用例が多いのは、上位三系列であり、そのうち「問ふ人系列」と「来る人系列」だけが八代集のすべてに使用されている。この二系列については、後に触れたい。また、『後拾遺集』と『新古今集』に比較的どの系列のものも使用されており、先のように『後拾遺集』で屈折し、『新古今集』で大成されたとする理解と整合しよう。

前稿で整理した恋歌の場合では、「つれなき人系列（33首）」「思ふ人系列（23首）」「知る人系列（19首）」「恋しき人系列（17首）」「見る人系列（16首）」「来る人系列（13首）」「待つ人系列（8首）」「忘るる人系列（8首）」「問ふ人系列（7首）」「憂き人系列（6首）」「頼む人系列（5首）」「つらき人系列（5首）」「物思ふ人系列（5首）」であった。この結果と四季歌を比べてみて、一方に突出する系列は次のようになる。

四季歌……都の人、行く人、昔の人、聞く人、尋ぬる人
恋　歌……つれなき人、恋しき人、忘るる人、憂き人、頼む人、つらき人

まず、この傾向を確認しておきたい。恋歌では心情を表す形容詞「つれなし」「恋し」「憂し」「つらし」が人に結びついて恋情とかかわっていたが、四季歌では、当然のことながら用例はあるものの表には現われない。四季歌の「…人」表現は形容詞では構成されないのであり、認められるのは、「恋しき人（古今・後撰各1）」「のどけき人（拾遺1）」「心なき人（千載1）」「つらき人（千載1）」などに過ぎない。心情や状態から人を捉えることは四季歌では有効ではないのであり、この点が恋歌との違いになる。また、「忘るる人」「頼む人」も愛情のありようと関係するものであり、これらも四季歌とは無縁となる。

恋歌と四季歌とでは、その主題性において「…人」表現の使用のされ方も違ってくることになる。四季歌では、どのような「…人」表現

が必然化されるのかを、右の、四季歌で突出している系列から見ていきたい。

二　四季歌に特徴的な「…人」表現

ここでは、先に挙げた四季歌の「都の人、行く人、昔の人、聞く人、尋ぬる人」の各系列についてみていく。特に目立つものは「都の人系列」の11例になり、恋歌では『拾遺集』に1例しかなかった。この系列には、「みやこ人」「みや人」「おほみや人」も含めている。「都の人系列」が詠まれる場合は、都の人が出かけて逍遥する様を詠む歌か、都と郊外・山里とを対比させる趣向の歌になる。具体的にみていきたい。

ア　群れて来る大宮人は春を経て変はらずながらめづらしきかな
（後拾・春上・一五・小弁）

イ　うらやまし春の宮人うち群れておのがものとや花を見るらん
（後拾・春上・一一一・良暹法師）

ウ　都人寝で待つらめや郭公今ぞ山辺を鳴きて出づなる
（拾遺・夏・一〇二・右大将道綱母）

アは、「臨時客をよめる」とあるもので頼通邸に人々が連れ立ってやってくる様である。イは、郊外の雲林院に逍遥するもので、「春の宮」には東宮が意味されており（後撰一六六も同）、「春の宮人」は雲林院の花を愛でて我が物顔に見ている。アと同じく「群れて」とあり、「都の人系列」に常用されるあり方となる。「都の人系列」の歌の趣向の一つは、こうしたアイのように、「群れて」逍遥する内容となっている。

ウは、時鳥の住む山里と都の対比であり、「都人」は寝ないで時鳥の声を待ち望んでいるのに対して、「山辺」ではもう鳴いているのである。この対比の趣向がある場合は、「山辺」が使用されているように、「山桜（後拾一〇〇）」「山里（詞花五八・千載四四八）」「山の端（新古六八〇）」などの「山」とかかわる語彙が認められる。こうした形で都と山里などが対比されるのであり、この対比の趣向は、以下でも確認するように、四季歌の特徴の一つとなる。それが「都の人系列」の歌を多くしていると言えよう。

「行く人系列」も四季歌を特徴づけるものであり、恋歌では3例しかなかった（後撰2、後拾1）。この系列には、「見に行く人」「過ぎて行く人」などのようにさらに修飾語が付いているものや、「行かむ人」「行き交う人」も含めている。ほとんどの場合が、次の歌のように、旅や所用で「行く人」になる。

エ　夏山の影をしげみや玉桙の道行く人も立ち止まるらん
（拾遺・夏・一三〇・貫之）

オ　夏草はしげりにけりな玉桙の道行き人も結ぶばかりに
（新古・夏・一八八・藤原元真）

オは、エを本歌としているようだが、いずれも「玉桙の道行く（き）人」がその場に立ち止まっている。「行く人」が、行くという行動において把握されるのではなく、その場の風情などによって立ち止まることを趣向としている。エは緑陰での納涼であり、オは道しるべとなる草結びの為である。次の歌も同じである。

カ　花の木を植ゑしもしるく春来れば我が宿過ぎて行く人ぞなき
（拾遺・春・五二・平兼盛）

咲き誇る花の木の風情に「過ぎて行く人」はいないとされ、皆立ち止まっている。「行く人系列」の歌は、行くのではなく、立ち止まるところに趣向を見出しており、これを逆手にとると次の歌になる。

キ　梅の花垣根に匂ふ山里は行き交ふ人の心をぞ見る
（後拾・春上・五八・賀茂成助）

ここで「行き交ふ人の心」を見ているのは擬人化された「山里」である。通り過ぎるか立ち止まるかで、「梅の花垣根に匂ふ」風情を解する人かどうかを、「山里」が判断しているとしている。この前提に「行く人」が風情を解するのであれば、立ち止まるものとする発想があるこ

とは確かである。「行く人系列」は、以上のような趣向で詠まれるほか、旅人に「言伝」を託そうとする歌もある。

ク　故里へ行く人あらば言伝てむ今日鶯の初音聞きつと
（後拾・春上・二〇・源兼澄）

ケ　玉桙の道行き人の言伝ても絶えてほどふる五月雨の空
（新古・夏・二三二・藤原定家）

「玉桙の便り」（源氏・夕顔巻）という措辞もあり、「玉桙の道行き人」と「言伝」とは当然結びつくものであった。

「都の人」「行く人」の場合を見てみたが、この両者は関連し、趣向も類同している。「都の人」が郊外や山里に逍遥すれば、「行く人」にもなる。イは、意味的には「春の宮人」が雲林院に「行く人」になり、そこの「花」の風情に立ち止まっている。「行く人」は杣人などの場合もあろうが、おもに「都の人」などが「行く人」となり、途中の風情に立ち止まるのである。このあり方は、四季絵や月並絵などが描かれた屏風絵の構図になる。ア・エ・カは、詞書から屏風歌と判明するが、四季歌の形成、四季歌の「…人」表現の形成に、屏風絵の構図がかかわっているのであり、「行く人」が立ち止まるのも、ここから発想を得ているのかも知れない。絵柄は、四季折々の郊外や山里の風情であり、点景的に描かれる逍遥する「都の人」が、その場に立ち止まって嘆賞しているという構図になろう。四季歌の「…人」表現の幾つかは、四季絵などが描かれた屏風絵に発想を得て、形成されていると言えよう。

＊　＊　＊

「昔の人系列」「聞く人系列」も四季歌の特徴的な「…人」表現である。恋歌では、『拾遺集』にそれぞれ一例ずつしかない。次に、「いにしへの人」一例を含めた「昔の人系列」を見ておきたい。

コ　五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする
（古今・夏・一三九・よみ人知らず）

サ　誰かまた花橘に思ひ出でむ我も昔の人となりなば
（新古・夏・二三八・皇太后宮大夫俊成）

シ　郭公花橘の香をとめて鳴くは昔の人や恋しき
（新古・夏・二四四・よみ人知らず）

コはあまりにも有名で言及するまでもない。サとシは、「花橘」を共有してコの歌を本歌としており、古今歌の再生となるが、「花橘」を回想の契機とするこの形での「昔の人」の使用は、恋歌にはなかった。古今歌は『源氏物語』「花散里」巻でも引歌になり、多様に影響を与えているものの、あまりにも印象が強烈なため、「昔の人」のこうした使われ方は敬遠されたのかも知れない。

ス　すだきけん昔の人もなき宿にただ影するは秋の夜の月
（後拾・秋上・二五三・恵慶法師）

セ　さざ波や志賀の花園見るたびに昔の人の心をぞ知る
（千載・春上・六七・祝部宿禰成仲）

スは荒廃した源融の河原院の、セはかつての志賀の大津京の「昔の人」を、秋月や花園から偲ぶものであり、有為転変する無常感に支えられている。回想の契機となるものは四季の風情であり、「昔の人」が思われるのである。

「聞く人系列」は、恋歌では「音に聞く人」（拾遺六二七）の一例しかなかったが、四季歌では動物の鳴き声を「聞く人」となる。その声を聞いたり聞かなかったりすることで醸し出される思いや情感が詠まれている。

ソ　夏の夜はさてもや寝ぬと郭公二声聞ける人に問はばや
（後拾・夏・一九〇・藤原兼房）

タ　待たで聞く人に問はばや郭公さても初音やうれしかるらん
（千載・夏・一五四・覚盛法師）

チ　夕まぐれさてもや秋はかなしきと鹿の音聞かぬ人に問はばや
（千載・夏・三二一・道因法師）

この三首は、共通する発想のもとで詠まれており、「聞く人」や「聞かぬ人」に「問はばや」とし、「さても」の措辞も共有している。ソの歌

がもとになると思われ、これがタやチに何らかの影響を与えていよう。このソは、「寝ぬ」の解釈に揺れがあり、寝たのか寝ないのかで両説がある。時鳥の声を聞くのは難しく、寝ないで起きていなければならないが、それでも「一声」だけ聞けるものとする発想がある。ここは「二声聞ける人」を羨んでいるのであり、二声聞けた場合でも寝なかったのかと尋ねてみたいとしているのだろう。タは、「待たで聞く人」の場合であり、待ちこがれることなく珍しい初声が聞けても、嬉しかったかと尋ねてみたいとしている。ソを反転させた歌となろう。チは、「鹿の音聞かぬ人」の場合であり、妻を恋い慕って鳴く鹿の声を聞くのは悲しいものだが、秋の夕べは、聞かなくても悲しいものかどうかを尋ねてみたいとしている。ソの歌とともに、タの歌も影を落としていよう。時鳥の声の珍しさや、鹿の声の悲しさが、「聞く人」「聞かぬ人」のありようを通じて表現されているのである。

「昔の人」歌のサ・シと、「聞く人」歌のタ・チは、「題知らず」であり、ソは歌合の歌である。いずれも題詠であったことになるが、こうした題も、四季歌の形成に預かっていよう。先蹤詠を踏まえて変奏させているが、四季の風物のありようは類型化したままであり、変容しているのは「聞く人」のあり方である。風物は変奏できないが、風物にかかわる人事のあり方は、多様に変奏できる。題詠の基本は、人事をいかに新しくするかであった。「聞く人系列」として処理する有効性も指摘できよう。

残るは「尋ぬる人」になるが、これは「問ふ人」とも重なるので割愛したい。以上、恋歌には多く認められなかった四季歌の「…人」表現を見てきたことになる。続いて、用例の多い「問ふ人系列」以下をみていきたい。

三、「問ふ人」の場合

「問ふ人系列」としたが、「言問ふ人」も用例に入れてある。ここに入るのは、「訪ふ人」と表記した方が適切なものが多いが、「問ふ人」でもいい場合がある。まず、この点を確認しておきたい。

1　ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかに問ふ人もなし
（古今・秋上・二〇五・よみ人知らず）

2　秋は来ぬ紅葉は宿に降り敷きぬ道踏み分けて訪ふ人はなし
（古今・秋下・二八七・よみ人知らず）

3　八重葎しげき宿には夏虫の声よりほかに問ふ人もなし
（後撰・夏・一九四・よみ人知らず）

4　あはれにも絶えず音する時雨かな訪ふべき人も問はぬ住処に
（後拾・秋上・三八〇・藤原兼房）

四首ほど挙げてみたが、「問ふ（問い聞く）」でも「訪ふ（訪問する）」でもかまわず、両方を掛けているとするのが妥当かも知れない。「とふ人」と表記すればいいことになるが、一応目安の意味で見通しだけ述べておきたい。すなわち、言葉や音が介在する場合は、「問ふ」を表に出した方がよく、そうでない場合は「訪ふ」でいいようである。「言問ふ」と表記されても、「言訪ふ」とはしないからである。1は「風」の音があり、3は「夏虫の声」があるので「問ふ」であり、2は、「道踏み分けて」やって来る意なので「訪ふ」となる。4は、「問ふ」と「訪ふ」が戯れているような歌になる。「時雨」の音があるので「問ふ」になるが、「とふべき人もとはぬ」と「とふ」を畳用していて問題である。新大系の注では、「「とふ」は、訪ねるの意とも安否を尋ねて音信する意とも解せる」としている。「訪ふべき人も訪はぬ」とも「問ふべき人も問はぬ」ともしているようだが、「訪ふべき人も問はぬ」ともとれよう。音信で済ませるより、出かけて行く方が誠意の度合が強いとすれば、「やって来てくれるはずの人も音信さえない」となり、より弧絶感が深まろう。作歌の意図を詮索すれば、この解になるかも知れないが、「問ふ」と「訪ふ」との戯れを企図しているようにも思える。また、『後拾遺集』の見出した詠風であるかも知れない。とにかく結論的には、一首のうちに言葉や音が介在する場合は、「問ふ」の意を

汲んでおいた方が適切であるとしておきたい。表記は、「問ふ」と「訪ふ」がともに機能している場合もあるので、「とふ人」が適切となろう。以下の引用は、「とふ人」で統一したい。

表現の問題にもどるが、右の例にも顕著なように、「とふ人もなし」の型が定着し、八代集を通じて多用されている。「とふ人もなし」は、四季の景物を除けば、人事において最も愛用された措辞となっている。「とふ人のなき」「とふ人ぞなき」など微妙な変化を捨象すれば、全25首のうち、半数の12首で使用され、そのうちの3首を除いた残り9首は、結句に用いられている。『古今集』と『後撰集』の7首すべては、この形である。また、「とふ人もなし」の形が変奏されて「とふ人もあらじ」などとされていくが、「問ふ人系列」の歌の多くは、「とふ人」が不在である。「とふ人もなし」は、類型性・規範性をもたらして愛用され、多用されていった次第が想定される。『後拾遺集』以降は、後に触れるように、この変奏と思われる形が生み出されている。「聞く人系列」が変奏されたのと同じである。

「とふ人もなし」やその変奏形が使用される場合には、とわれる場所が明示されることが多く、また、「とふ人」になり代わる四季の景物が配置されている。先の1では、「山里」であり、「とふ人」に代わって「風」がある。物寂しい秋の夕暮の風である。2は、山里にあるらしい「宿」であり、「とふ人」に代わって散り敷かれた「紅葉」がある。3は、「八重葎しげき宿」の「夏虫の声」であり、4は、「住処」に「絶えず音する時雨」となる。「とふ人もなし」を使用する歌は、場所とそこの景物とともに三者一体となって型になっている。

「とふ人もなし」とされる場所は、多くの場合、山里や故里になる。「山里」と判断される場合の歌は14首、「故里」は3首である。「とふ人もなし」は、「山里」の物寂しい風情とかかわることでより弧絶感を表現し、その心が景物と重なっている。逆に言えば、「山里」の風情を表現するために、「とふ人もなし」が愛用されたことにもなる。

「とふ人もなし」は山里の風情であったが、山里や故里でない場合は、世間や友人との交渉の断たれたような住処となっている。

5　心もてをるかはあやな梅の花香をとめてだにとふ人のなき
（後撰・春上・二九・よみ人知らず）

6　白妙に匂ふ垣根の卯の花のうくも来てとふ人のなきかな
（後撰・夏・一五四・よみ人知らず）

5には、「男につきて、ほかに移りて」、6には、「友達のとぶらひまで来ぬことを恨み遣はすとて」との詞書があり、いずれも山里ではない。世間や友人との交渉の断たれた住処であり、こうした場合の景物は物寂しいものではなく、逆に人々に愛でられるものになる。右の歌では「梅の花」や「卯の花」になり、愛づるべきものが愛でられないことで「とふ人もなし」の寂しさが強調されるのである。

以上、「とふ人もなし」の型を確認してきたことになるが、続いて八代集の詠風の変奏をみていきたい。

＊　＊　＊

『古今集』『後撰集』については、これまでに挙げた用例で基本的な詠風は押さえられる。『拾遺集』になると、「とふ人もあらじ」の形が現われ、これが初句に据えられるようになる。

7　とふ人もあらじと思ひし山里に花の便りに人目見るかな
（拾遺・春・五一・元輔）

8　とふ人も今はあらしの山風に人まつ虫の声ぞかなしき
（拾遺・秋・二〇五・よみ人知らず）

9　とふ人も宿にはあらじ山桜散らで帰りし春しなければ
（後拾・春上・一二三・良暹法師）

7の歌の「山里」に対して、新大系の注では、「寂寥・孤独の地という印象が強かったが、拾遺集頃から、閑寂な風光の小世界といった美意識が加わる。山里に、花見につけてであっても、ともかく人が訪問するのである」と指摘している。「山里」一般に対しては首肯されるが、「とふ人もなし」や「とふ人もあらじ」の形と結びつく場合は、「閑寂な風光の小世界」であっても、物寂しさはつきまとうようである。

8では、「山里」の語彙はないが、「山風」とあるのでその場所となる。新味は、「あらし」に「嵐」が掛けられていることで、基本的には「とふ人もなし」と同じであり、山里の「松虫の声」が配置されていて、これまで通りの詠み方になる。

9の『後拾遺集』になると、基本的本来的なものからの変奏が認められる。「とふ人も宿にはあらじ」の「宿」は、都の自邸のことであり、山里ではない。「山桜」を見に人々は山に入っているのであり、散らないうちは自邸に帰りついた春などなかったとしている。「とふ人もあらじ」とされる場所が本来的ではなく自邸なのであり、「山桜」を見に出かけて人々は不在なのである。ここに趣向を見出していることになる。

次は「とふ人」がいる場合である。

10　香をとめてとふ人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりける
（後拾・夏・二一〇・恵慶法師）

11　とふ人も暮るれば帰る山里にもろともにすむ秋の夜の月
（後拾・秋上・二五九・素意法師）

10は、菖蒲歌群に位置する後撰集時代の恵慶法師の歌であり、「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（古今・雑上・八九二・よみ人知らず）を引歌にしている。この「刈る人」は下草を刈る人になるが、10では、「香をとめてとふ人」も刈る人になる。また、「刈る人」は「なし」であったが、「香をとめてとふ人」は「ある」となる。したがって、古今歌では、「刈る人」もいず、「駒もすさめず」であったが、10は「刈る人」があるのに、「駒もすさめざり」になり、ずらしていることになる。ここに趣向が認められるが、「とふ人もなし」ではなく、「とふ人ある」とする措辞に着目して入集された可能性が想定できる。

11は、「とふ人」がいて、帰った後のことが詠まれている。歌の現在では、「とふ人もなし」であり、「山里」に「秋の夜の月」が配置されている。詞書から「山寺」であることがわかり、参詣のために「とふ人」が日中にはいたが、夕暮になって帰参し、「山里」の風情になるのである。三代集のようなあり方よりもやや複雑になり、ずれていよう。

ずれやずらしは『後拾遺集』の特徴になるようだが、次の歌もそのようである。

12　とふ人のなき蘆葺の我が宿は降る霰さへ音せざりけり
（後拾・夏・四〇〇・橘俊綱）

これは、4「あはれにも絶えず音する時雨かな訪ふべき人も問はぬ住処に」のような、「絶えず音する時雨」を変換してずらし、「降る霰さへ音せざりけり」としている。「蘆葺」だから霰の音が消えるわけだが、音もなく、人が音なうこともないとして、物寂しさをいうのである。

『金葉集』から『千載集』にかけては、次のような歌が見出せる。

13　山深みとふ人もなき宿なれど外もの小田に秋は来にけり
（金葉・秋・一七二・藤原行盛）

14　故里にとふ人あらば山桜散りなむ後を待てと答へよ
（詞花・春・三〇・左近中将教長）

15　荻の葉に言とふ人もなきものを来る秋ごとにそよと答ふる
（詞花・秋・一一七・敦輔王）

16　故里は花こそいとどしのばるれ散りぬる後はとふ人もなし
（千載・春下・一〇二・藤原基俊）

17　故里にとふ人あらばもみぢ葉の散りなん後を待てと答へよ
（千載・春・三五八・素意法師）

13は「とふ人もなき」と「秋は来にけり」の対比であり、人は訪れないが秋は来ているとしている。単純に「とふ人もなし」とするのではなく、「とふ」物を見出している。『古今集』や『後撰集』では、「とふ人もなし」が結句に位置することが多かった。この歌では、第二句に位置することで、下に逆説的に展開する契機をもたらしている。これは『後拾遺集』の10の歌でも認められた現象になるが、結句に位置す

る型を脱することによって、より自由な詠作が可能となっている。

14では、「とふ人あらば」となっているが、この「故里」は山里のものではなく実家である。趣向としては、9「とふ人も宿にはあらじ山桜散らで帰りし春しなければ」と同じであり、自邸から「山桜」を見に出かけているのである。この14は、17の歌とほとんど同じ措辞になり、顕昭は17の「紅葉」を「花」に換えたとしているが、9の歌も参照している可能性があろう。

15は「言問ふ人」の形であり、尋ね聞く意になる。「荻の葉」と「そよ」の取り合わせは珍しいものではない。16は「花」の頃には「とふ人」があったが、「散りぬる後はとふ人もなし」となっている。新大系の注に「再び孤独寂寥の日常にもどった古里人の慨歎」とする通りである。総じて、『金葉集』から『千載集』にかけての歌は、『後拾遺集』で、「とふ人もなし」の型がずらされたことを踏襲していたと言えよう。

『新古今集』では、次の四首が認められる。

18　花散ればとふ人まれになりはてて厭ひし風の音のみぞする
（新古・春下・一二五・刑部卿範兼）

19　八重匂ふ軒端の桜移ろひぬ風より先にとふ人もがな
（新古・春下・一三七・式子内親王）

20　とふ人もあらし吹きそふ秋は来て木の葉にうづむ宿の道芝
（新古・秋下・五一五・皇太后宮大夫俊成女）

21　かき曇りあまぎる雪のふる里を積もらぬ先にとふ人もがな
（新古・冬・六七八・小侍従）

18は、16と同じく「花落客稀」を題にしており、「客稀」が「とふ人まれに」になっている。文字通りになろう。歌の趣向は相反しており、16は「花」の時期を偲び、18は「花」を散らした「風」を忌々しく思っている。「偲ぶ」が「厭ふ」に反転しているが、そうであることによって、16を意識していたともとれよう。また、8「とふ人も今はあらしの山風に人まつ虫の声ぞかなしき」もかかわっているかも知れない。「とふ人まれになりはて」は、「とふ人も今はあらし」であり、「いとひし風の音」は、「山風…ぞかなしき」である。18は、先蹤詠と戯れつつ、落花後の風音のみが響く情調をいうのである。

19は、「とふ人もがな」の形になっており、これまでは14や17にあった「とふ人あらば」の仮定形から、強い願望表現となっている。この歌は、実際に八重桜の枝に付けられて贈歌されており、招請の意が込められている。だから、強い願望表現となるが、歌の実際から離れてみると、その願望は違って見えてくる。本歌は『源氏物語』「若紫」巻の「宮人に行きて語らむ山桜風より先に来ても見るべく」であったが、この歌に拠れば「来る人もがな」としてもよかったところである。しかし、「とふ人もがな」にすることで、これまでみてきた歌々の系譜に連なっている。強い願望は、「とふ人もなし」とする認識があるからこそになり、願望は空転していよう。自立する歌の世界では、「八重匂ふ軒端の桜」の移ろいへのまなざしが主題性を帯びるのである。

20は、8「とふ人も今はあらしの山風に人まつ虫の声ぞかなしき」や、2「秋は来ぬ紅葉は宿に降り敷きぬ道踏み分けてとふ人はなし」などもかかわっていよう。この歌は『千五百番歌合』のもので、定家は「秋のあはれを尽くして恋の心に通へり」と判じている。四季歌の「とふ人もなし」詠は、山里の風情とかかわっていたのがこれまでであった。新古今時代になると、恋の情調にも連なる歌も四季の部立に入るのである。「問ふ人系列」が恋歌で使用されたのは、『拾遺集』と『金葉集』に一首ずつしかなかった。しかし、『新古今集』では、五首も恋の部立で使用されているのである。

21は、19と同じように「…先にとふ人もがな」を結句に据えている。かかわりが想定できるかも知れないが、この願望は願望として、「かき曇りあまぎる雪のふる里」とされる印象も際立っている。この風景に対するまなざしにも注意されるのであり、19と同じく新古今調となっていよう。

「とふ人もなし」が使用された歌で提示された景物は、多くの場

合、物寂しさを表現していた。しかし、『新古今集』では、その景物に対するまなざしも主題化されていたと言えよう。様々な先蹤詠と戯れつつ、新古今調が成立しているのである。

＊　＊　＊

以上、「問ふ人系列」の四季歌をみてきたが、これが愛用されたのは、恋歌で「つれなき人系列」が愛用された事情と見合っているかも知れない。多くは「とふ人もなし」の型になっていたが、この「とふ人」は「とふ」ことをしないので「つれなき人」になる。恋の高まりではなく、恋の不如意が問題になるからこそ、「つれなき人」が主題化され続けていた。「とふ人」がいれば問題はないが、いないからこそ「とふ人もなし」が主題化されていた。状況的にはこうした心性とかかわることになろうが、一方では、「都」と対比される孤絶した「山里」の風情や美学を表現するのに適した表現が「とふ人もなし」であったことになる。愛用された事情は個別的には多様に考えられようが、さらに次の系列に転じたい。

四　「来る人」の場合

「とふ人」は、行動からすれば「来る人」になるが、この両者は重なる面があるものの、それぞれ独自の意味合いも保持している。「行く人」の場合は、ほとんど旅中の人か所用に出向く人の意がほとんどであったように、「来る人」の使われ方にも偏りが認められる。ここでは、四季歌の用例を一覧した上で、簡単な整理をほどこしておきたい。

①　我が宿の花見がてらに来る人は散りなむ後ぞ恋しかるべき
（古今・春上・六七・躬恒）

②　今宵来む人には逢はじ七夕の久しきほどに待ちもこそすれ
（古今・秋上・一八一・素性）

③　まつに来る人しなければ春の野の若菜も何もかひなかりけり
（後撰・春上・六・朱雀院）

④　花見には群れて行けども青柳の糸のもとにはくる人もなし
（拾遺・春・三五・よみ人知らず）

⑤　秋の野の花の名たてに女郎花かりにのみ来む人に折らるな
（拾遺・秋・一六四・よみ人知らず）

⑥　山里は雪降り積みて道もなし今日来む人をあはれとは見む
（拾遺・冬・二五一・兼盛）

⑦　摘みに来る人は誰ともなかりけり我がしめし野の若菜なれども
（後拾・春上・三六・中原頼成妻）

⑧　我が宿の梅の盛りに来る人は驚くばかり袖ぞ匂へる
（後拾・春上・五六・前大納言公任）

⑨　尋ね来る人にも見せん梅の花散るとも水に流れざらなん
（後拾・春上・六四・藤原経衡）

⑩　ここに来ぬ人も見よとて桜花水の心にまかせてぞやる
（後拾・春下・一四五・大江嘉言）

⑪　尋ね来る人もあらなん年を経て我が故里の鈴虫の声
（後拾・秋上・二六九・四条中宮）

⑫　かりに来む人に折らるな菊の花移ろひ果てむ末までも見む
（後拾・秋下・三五四・大中臣能宣）

⑬　糸鹿山くる人もなき夕暮に心細くも呼子鳥かな
（金葉・春・二六・前斎院尾張）

⑭　我が宿にまた来む人も見るばかり折りな尽くしそ山吹の花
（金葉・春・七六・中納言雅定）

⑮　来る人もなき我が宿の藤の花誰をまつとて咲きかかるらん
（金葉・春・八三・律師増覚）

⑯　かりに来る人も着よとや藤袴秋の野ごとに鹿の立つらん
（金葉・秋・二三五・右兵衛督伊通）

⑰　来ぬ人を待兼山の呼子鳥同じ心にあはれとぞ聞く
（詞花・春・四七・太皇太后宮肥後）

⑱　今よりは梅咲く宿は心せん待たぬに来ます人もありけり
（千載・春上・一九・大納言師頼）

⑲　行かむ人来む人偲べ春霞竜田の山の初桜花
（新古・春上・八五・中納言家持）

⑳　郭公まだうちとけぬ忍び音は来ぬ人を待つ我のみぞ聞く
（新古・夏・一九八・白河院）

以上の20首が四季歌における「来る人系列」の全用例である。これを使用される傾向から分類的に整理すると次のようになる。

ア　「宿」の花が主眼の用法　……①⑧⑨⑩⑭⑮⑱
イ　「待つ」と呼応する用法　……②③⑰⑳
ウ　「繰る」と掛詞になる用法……④⑬
エ　「かりに来む」の形の用法……⑤⑫⑯
オ　「とふ人」と重なる用法　……⑥
カ　その他の用法　……⑦⑪⑲

以下、この分類について補足していきたい。アは、「宿」の花が主眼の用法としたが、このうちに「宿」の語がないのは⑨⑩になる。しかし、⑨には詞書に、「道雅三位の八条家の障子に、人の家に梅の木ある所に、水流れて客人来たれる所をよめる」とあり、⑩には「家の桜の散りて水に流るるをよめる」とあり、歌には「宿」がなくても、詞書でわかるようになっている。そして、⑨⑩ともに遣水に浮かぶ花弁に主眼があり、「尋ね来る人にも見せん」「ここに来ぬ人も見よとて」と相似した措辞のもとに置かれている。来る来ないは別にして、ここに入れた歌は、「宿（自邸）」の花に主眼があり、「とふ人」詠が山里であったのと相違している。「とふ人」と差別化された「来る人」の用法が必然化される所以である。なお、⑮⑱には、「待つ」もあり、次のイの用法と重なっている。この例のように、分類はあくまでも便宜のものである。

イは、「待つ」と呼応する用法であり、恋歌的な情趣が秘められている。詳説はできないが、四季歌における「待つ人」の用法と関連しよう。③は、贈答歌の返歌であり、贈歌には、「朱雀院の子日におはしましけるに、さはること侍て、え仕うまつらで、延光朝臣につかはしける／左大臣（実頼）」との詞書がある。子の日の実頼不参に対する朱雀院の返歌であり、「待つに来る人」には「松」が掛けられ、「若菜」には「我が名」も甲斐がなかったの意も響かせている。戯れの歌になるが、臣下との親和が基底にあろう。「とふ人」の場合は、「とふ人もなし」となり、「待つ」は断念されていたが、「来る人」の場合は、「待つ」が必然化されるのである。

ウは、「繰る」と掛詞になる用法で、「糸」とともに詠まれている。⑬「糸鹿山くる人もなき夕暮に心細くも呼子鳥かな」の場合は、「くる人もなき」の形であり、「とふ人」と重なる用法と見ることもできる。「糸鹿山」の山里で、「とふ人」「来る人」に代わって「呼子鳥」がいるのである。「呼子鳥」は、イに入れた⑰にもあり、ともに「呼ぶ」との掛詞になっており、イの「待つ」と呼応する用法に入れることもできよう。「心細くも呼ぶ」のは、「待つ人」をである。

エは、「かりに来む」の形の用法で、「かり」は、「刈り」と「仮り」の掛詞になる。⑤⑫には、「折る」があるのは、「刈りに来る人」がいるからである。⑫は、⑤に拠っている可能性がある。⑯「かりに来る人も着よとや藤袴秋の野ごとに鹿の立つらん」の場合は、「折る」ではなく「裁つ」になるが、「着る・袴・裁つ」の縁語関係が響くので「借りに来る人」の意も潜められているかもしれない。ウ・エとともに「とふ人」ではあり得ない用法である。

オは、「とふ人」と重なる用法であり、⑥「山里は雪降り積みて道もなし今日来む人をあはれとは見む」は、引用しなかったが、「我が宿は雪降り敷きて道もなし踏み分けてとふ人しなければ」（古今・冬・三二二・よみ人知らず）と同趣向とも見られよう。

カは、その他の用法であり、⑦は「摘みに来る人」であり、「摘む」

に主眼がある。⑪「尋ね来る人もあらなん年を経て我が故里の鈴虫の声」も、単に「来る人」ではなく「尋ね」が主要になるが、「故里」とあるので、アの変奏ともとれる。⑲「行かむ人来む人偲べ春霞竜田の山の初桜花」は、「行かむ人来む人」であり、ここの詠み方は「行く人」のそれとなる。「竜田の山の初桜花」に立ち止まるのである。

以上、「来る人系列」のあらましを分類的に見てきた。「とふ人」とは相違する用法が多く認められるのであり、それぞれの系列が必然化される次第も確認できた。さらにこうした検討が必要であろう。

おわりに

四季歌における「…人」表現のうちから、主に「都の人」「行く人」「昔の人」「聞く人」「問ふ人」「来る人」の各系列を検討してきた。これらの「…人」表現も、歌ことばと認定できるのである。四季歌の場合は、折々の景物に対しては、多様な言及がなされているが、人事とのかかわりについてはあまり注意されてはいなかった。四季歌で「…人」表現に注目することは、四季歌に人事がいかにかかわるか、人事がいかに必然化されるかの検討にもなるのだと思われる。本稿では「…人」表現のありようの検討に主眼をおいたが、こうした視点をより深めていく必要があろう。また、用例の多い、「見る人」「知る人」「思ふ人」などの検討も残されている。今後の課題を確認して、ひとまず終わりにしたい。

注

(1) 拙稿「平安朝恋歌の「…人」表現―その傾向と「つれなき人」をめぐって―」(『大妻女子大学紀要―文系―』33、二〇〇一年三月)